

1. しかし、サマリヤを歩いて行かなければならなかった。それで主は、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近いスカルというサマリヤの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は第六時ごろであった。(4:4-6)
  - a. たいていのユダヤ人は儀式的に汚れるのを避けるためサマリヤを通ることを避けていた。イエスがサマリヤを通らねばならなかったのはイエスに対するユダヤの宗教指導者たちの敵がい心が高まっていたから、あるいは聖霊が働かれたからであろう。
  - b. 私としてはこれは聖霊による導きだったと考えたい。よってイエスはサマリヤを通り、よって〈ネタバレ注意〉そこで出会う女が主を信じた。
  - c. 聖霊に導かれている時というのは天からの超自然的な元気に満たされ、力がみなぎるのではないかと思うことがあるが、ここでのイエスはそうではなかった。イエスはお疲れになった。疲れたので休まれた。今この言葉が必要な方もおられるのではないだろうか？ 疲れることは悪いことではない(罪ではない)し、休むことも悪いことではない(罪ではない)。むしろ休まないことは明らかな罪である。また他の人を休ませないことも罪である。
  
2. ひとりのサマリヤの女が水をくみに来た。イエスは「わたしに水を飲ませてください」と言われた。弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。そこで、そのサマリヤの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」—— ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである。(4:7-9)
  - a. この場所はアブラハムのような人たちが神と出会った歴史があったが今はユダヤ人から遠ざけられていた。そのような場所で神がイエスの御からだを通して休まれているというのは何だか詩的でもある。
  - b. ここにサマリヤの女が水を汲みに来、かつて神聖だった場所は再び神のご臨在の場となる。水を汲む時間は気候が良く、他の人もいるので安全で、社交の場ともなる早朝が良いとされている。
  - c. この女は他の人と会うのを避けていたのか、あるいは仲間外れにされていたのか、午後に一人だけで井戸にやって来た。そこで神との出会いがある。
  - d. 神との遭遇というと、燃える芝、幻、天使、まばゆい光などを私は想像する。そして神とふれあう時にはしっかりしたつながりが持てるように神が一切の障害や妨げを取り払ってくださるように考えるが、ここではそうではなかった。視覚的にも感覚的にもごく普通の光景であった。
  - e. なぜ神は時としてこのような方法をとられるのか私にはわからない。いつでもこのような形をとられるわけではないが、福音を通して見ても、イエスに敵対する者はしばしば神との出会いを逃している。現代でもそのようなことは起きているのだろう。
  
3. イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょうか。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょうか。」(4:10)
  - a. 神の賜物はすぐそこにあるのに、私たちの思いもよらない現われ方をするので気付かない時がある。
  - b. 神は平凡なひび割れた土の器に宝を隠されるお方であり、神のやり方やみ心は私たちのものとは違うということ覚えておきたい。
  - c. この女はまったくわけがわからなかったことであろう。まずは大きな社会的常識が破られ(訳者注：公の場で男性が女性に声をかける、ユダヤ人がサマリヤ人に声をかける、ユダヤ人がサマリヤ人に何かを頼む)、この人が何者かもわからず、「生ける水」というコンセプトも何のことがわからなかった。私たちも神と出会う時、神から賜物を受け取る時、この女と同じように理解できていないのではないだろうか。今見ているものは何なのか、何を言われているのか、そしてどのように受け取ればよいのか、わからないことがある。
  - d. これが私たちクリスチャンが(残念なことに長くクリスチャンでいるほど、また自分は賢いと思っている人ほど)つまづく部分である。何でも知っているふりをして、プライド、宗教的動機、文化的偏見(しっかりした教義ではなく)に任せて行動すると、神が与えてくださろうとしているものを見逃してしまう。しかし私たちが謙遜、柔軟になり、人生に神の恵みが働かれるようにするなら、神の賜物を受けられる人生へと変えられていく。